

近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

さんぽう

三方よし

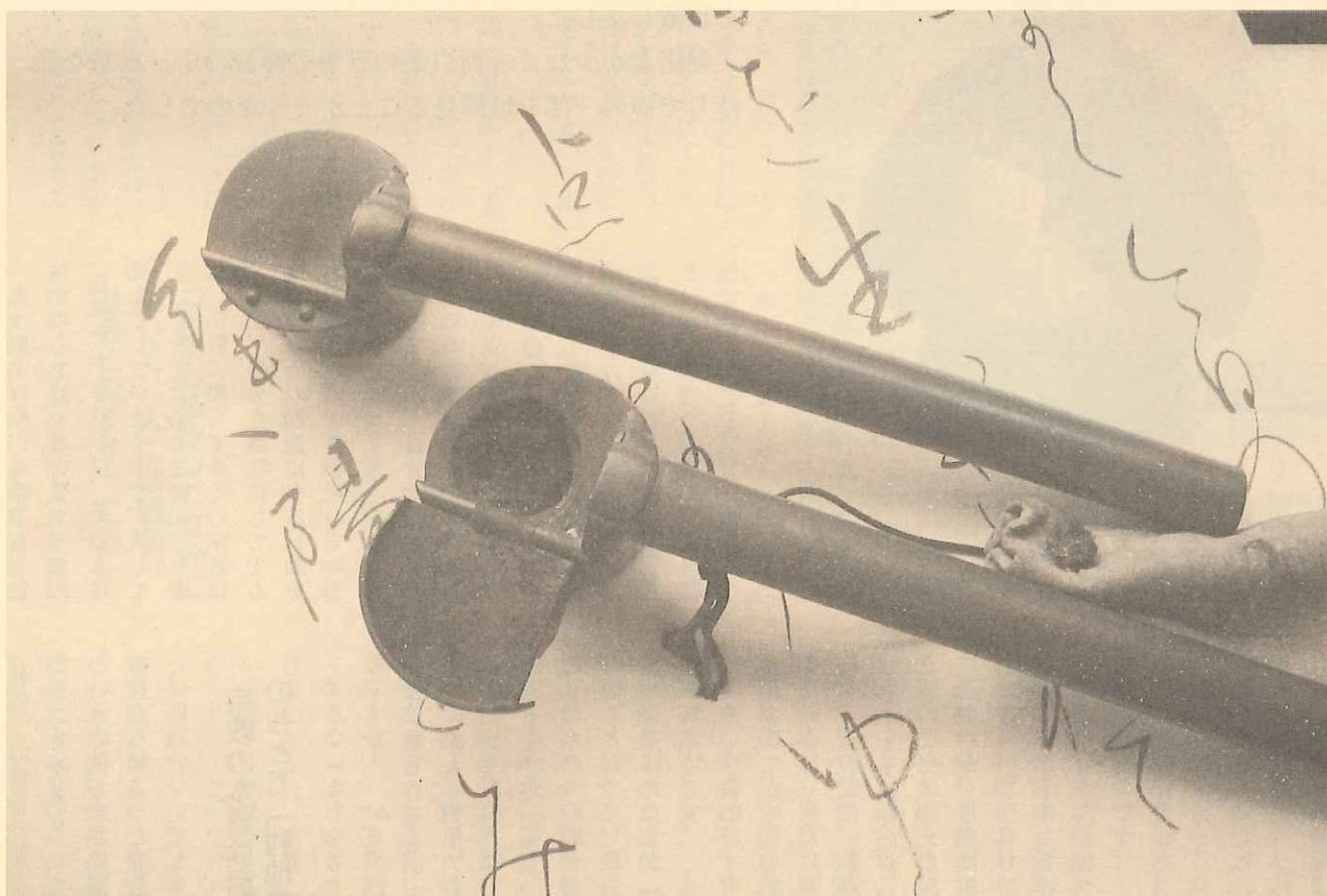
第27号
2005/7

CONTENTS

三方よし理念講座報告

「三方よし」の精神は信仰そのもの／「まちづくりに生きる西田天香の『無の精神』」

平成17年度「三方よし なるほど講座」開催のご案内



商いの道具考 その②矢立

いまやオフィスの主たる筆記具は、キーボードになりつつあるが、主流はボールペンやシャープペンシルである。そして万年筆の人気も衰えていない。文章を書く時には万年筆に限るという方も多く「やはり万年筆はモンブラン」「いやパーカーの方が」など、数万円もする万年筆もまだまだ人気が高い。旅の達人、近江商人が使った筆記具は写真の矢立である。墨壺に筆を入れる管をつけて一個の用具とし、携帯の便利を図ったのである。墨壺にモグサなどを入れて墨汁をしみこませ、こぼれないように工夫がしてある。鎌倉時代には、えびらの矢立などと呼び武士がえびらに入れて持ち歩いた。そして近江商人が活躍した江戸時代には墨壺が丸くなり、腰に差して歩くのに便利になった

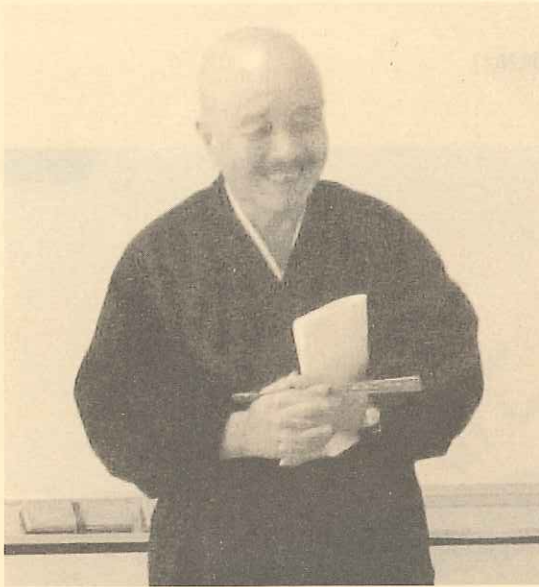
ところで、江戸文化年間に出版された旅の便利長「旅行用心集」(八隈蘆庵著)には、旅の所持品として「矢立・扇子・糸針・懐中鏡・日記手帳(一冊)・櫛・髻付け油・提灯・ろうそく・火付け道具・懐中付け木・麻綱・印板・かぎ」と記され、一番に矢立が登場。商いの旅をした商人の旅道具はおそらくもっと簡略であったと思うが、いずれにしろ矢立が必需品であったのは当然であろう。

第11回三方よし理念講座より

「三方よし」の精神は信仰そのもの

■井上義正 氏 (大本山永源寺 教学科)

平成17年1月22日 大本山永源寺にて開催



井上義正 (いのうえよしまさ) 氏

永源寺町大竜寺住職。立命館大学理工学部数学科卒業後、滋賀県内の県立高校教諭・教頭を経て、滋賀総合教育センター、県立甲南高校校長を最期に退職。現在は専門学校や短大の非常勤講師などを務める。平成15年4月より永源寺教学科。

平成17年1月22日、その日は、この冬一番の積雪でしたが、永源寺町の多大のご支援によって、大本山永源寺で講演をお聞きし、その後には、簡略な座禅と精進料理を頂戴しました。

参詣者が少なく一面白銀の世界の静寂の中、真摯な気持ちで禅の一部を垣間見ることができたのでした。

人は生まれながら誰でも「我執」の心を持っています。この「我執」がなければ、その人は死んでしまいますので、決して悪いことではありません。しかし、仏教に限らず多くの宗教は「利他」、自分を犠牲にしても他人のための利益になる行動をすることの大切さを説いています。ボランティアも「利他」に近いのですが、自分を犠牲にしてまでのボランティアは、ほとんど成立しません。

「利他」の精神と非常に似通ったところがあり、「三方よし」というのは、まさに宗教信仰の精神から起こった発想であることに間違いありません。

宗教の本質は自己犠牲のもとで「利他を追求」

できないことを考えるのが宗教ですから、いざ実践となると非常に難しく厳しいものです。宗教で説く「利他」とは、たとえばキリスト教では、イエスが磔刑を受けたとき、「私を磔刑にした人たちの罪をお許しください」と言って、最も重い刑を自らが受けたことが『聖書』に書かれています。

一方、宗教的に、有名な「捨身餓虎図」が中国の敦煌と日本の法隆寺に二枚だけ残されています。この絵は、釈迦の前世のサツタ王子が狩に行ったとき、七匹の子虎を抱えた飢えた母虎に逢ったが、母虎は飢えのため動けないので、哀れに思った王子自身が、子虎たちの前に身を投げて自分の肉を食べさせる姿を描いたものです。

これらのいずれも、宗教の本質が自己犠牲のもとに「利他」を追求するものだということを表現しています。「我執」とも「利他」の精神は、本来は

人間の誰もが持っています。人のために尽くすことを、キリスト教では「愛」と言い、仏教では「慈悲」と呼びます。ここで誤解されてはいけないのですが、キリスト教の「隣人を愛せよ」というのは『旧約聖書』にある言葉で、イエスの思想とは違います。イエスの場合は、隣人と限定していなくて、「万人を愛せよ」です。

こうした、万人を愛する慈悲心による「利他」の精神が少しでも発揮できたら、いま日本で起きている、さまざまな不祥事、信じられないような事件は決して起こらないでしょう。

線路に落ちた人を助けようとした二人の青年の気持ち

何年前かに、東京のJR大久保の駅のホームで、酔っぱらいが線路に落ちたのを見て、救い出そうとして日本人と韓国人留学生の二人の青年が線路に飛び降りたが、残念ながら三人とも亡くなった事故がありました。決して助からない状況がわかっているのに、二人は助けたい一心で飛び降りた。これこそ人間の心のなかには「利他」の精神、宗教的な心が必ずあるのだというのを証明しているのではな

残念な教育現場の現実

いでしようか。
ただ残念なことに、日本では「教育基本法」のもとに、公立の学校では特定宗教に関する教育をしてはならないことになっています。このため学校の現場では、給食の時間に児童が「いただきます」と合掌するのも、宗教行為の一環だからと禁止したり、ある小学校の校長先生が、クリスマススイブにサンタクロースに変身して、生徒にチョコレートを渡したら、周囲から宗教行為だと突き上げられた例もあります。

こうした宗教心を排除した教育を受けた子どもたちが成長すると、小さな子どもを何のためらいもなく殺したり、赤ちゃんが泣くから殺してしまう親が出てくる危険性が大いにあるでしょう。こうした危機的な社会状況から、道徳心を養うために宗教的な情操教育をするべきだという議論が盛んです。つまり、宗教心なくして道徳心は育たないことに、やっと人々の多くが気付きはじめたのです。
道徳とは、こうしなければならぬ、こうすべきだという世間の目からの判断です。宗教心というのは、道徳からもう一步

進んで、何にも誰にも言われることなく、こうしようと自分の心のなかから自然に起こる価値基準です。
つまりわかりやすく言うとう自動車ブレーキだと思ってください。意識することなくブレーキを踏む心こそが宗教心です。

言葉こそが相手の心を動かす

相手の立場になって考えることも、宗教の教えているところ。曹洞宗の開祖道元は「同事を知るとき自己一如なり」と言っています。禅宗の『観音経』では「三十三に身を分けて」と説いています。どちらも本筋は、相手の立場と同じ視点でものごとを見つめ、考えようという意味です。

たとえば医師や看護師が、患者と同じ目線にまでしゃがんで、手を握り、言いたいことを徹底的に聞いてあげる。親も、子どもの目線に立ち、優しい笑顔で子どもの言いたいことを先に聞いてあげる。これこそが相手の立場を尊重した「利他」になるのです。

人間関係を強く結ぶものは、メールでも電話でもありません。お互いが向き合って話すことが一番大事なことです。

宗教心で、もう一つ思うことは、最近の日本人は「死」という現実にもあまりにも無関心になっていくのではないかとこのことです。人間が生まれたときは、多くの人は喜んでお祝いしますが、死んだ人のことについては、葬式を終えたらおしまいたいという状況が増えているように感じています。

細川ガラシャ夫人は、辞世の句として「散りぬべき時知りてこそ世の中の花も花なれ人も人なれ」と詠んでいます。

第二次世界大戦の敗戦直前、鹿児島県の知覧特攻基地から、「アリアンの歌声とほく母の国に念ひ残して散りし花花」という歌を残して、韓国籍の光山少尉は、二度と還れぬ飛行に向かいました。

ガラシャ夫人も光山少尉も、死というものを非常に大事にしていたと思います。また、言葉だけでなく、死を花と見た感性、これも私たちは大切にしなければならぬのではないのでしょうか。

「宗教心を持って自分に厳しく、人には親切、社会に尽くす」こと

戦後の日本社会は、お金儲け一途に動き、たしかに経済的に

は世界の一流国になりましたが経済一辺倒の社会でさまざまな事がおこってきています。宗教心によるブレーキを踏んでいけば、現状のような社会にはならなかったはずですが。

二〇〇三年に開業したアメリカのある銀行は、頭取が熱心なキリスト教信者でしたので、企業活動の中心を宗教にすえています。たとえば住宅ローンを申し込みにきた人に、支店長が「おおよ、彼らのために最高の家を与えたまえ、アーメン」と、最初にお祈りを捧げてから、交渉をしているそうです。こんなに宗教色が強いと企業活動に支障があるのではないかと思われるでしょうが、それが逆なのです。宗教色を出していない銀行から、口座がどんどん移り、ここ三年間で八倍の預金量までに成長しています。

多くの人は、いまの社会のなかで、宗教という癒しを求めているからです。また、アメリカの有名な経済学者の調査によると、信仰心のある職場の生産性は向上するという結果を得ています。

最初に申しあげましたが、「三方よし」の精神は理念ではなく信仰そのものです。「売り手よし」も「我執」だけだと捉えずに、自分に厳しくと理解していただき、「買い手よし」「世間よし」の「利他」の信仰心を大切にされて経済活動をしていただきたいと、この機会にお願いしておきます。「三方よし」を宗教的に言い換えれば、「宗教心を持って自分に厳しく、人には親切、社会に尽くす」ことではないでしょうか。信仰を持たない人間ほど寂しいものはありません。どんな信仰でもかまいません。ぜひ何かを信じていただきたい。
(終了)



当日の永源寺

第12回三方よし理念講座より

「まちづくりに生きる西田天香の『無の精神』」

平成17年2月26日 長浜開知学校にて開催

長浜のまちづくりのスタートは黒壁を壊さないために

黒壁が昭和62年に、不動産屋の手に渡り取り壊されそうになったことから、長浜の街づくりは出発しました。市民の中から保存運動が起こり、第3セクターの株式会社黒壁が設立となり、それから次々と市民が参加した街づくりが展開してきましたが、この事業展開の中に、長浜が生んだ偉大な思想家「西田天香」の理念が息づいていたのです。



吉田一郎 (よしだいちろう) 氏

長浜市助役

1942年、滋賀県長浜市国友町に生まれる
 県立長浜農業高等学校卒業後、長浜市役所入庁
 同市企画課長、経済部長、教育部長、市立長浜城歴史博物館館長を経て平成15年より長浜市助役
 著書／『北近江 農の歳時記』および『湖北賛歌』は第5回日本自費出版大賞を受賞

黒壁の誕生

黒壁の設立には、中心市街地の再生・活性化を図ることが目的であったので、既存業種との競争を避けるという大前提があり、大企業で真似のできない分野を追求し、企業の永続性を考え、文化芸術性と国際性を重視していくことが大きな課題であると考へ、ガラスを中心の事業展開に取り組みました。

黒壁がその後成功したのは、ガラスが時流に乗ったこと、まちづくり会社として役員のみならずの使命感、利潤よりもまちの活性化をとという経営理念、そして、長浜市博物館都市構想というまちづくりの理念があったからです。

黒壁は、七人の民間の出資と長浜市と地元信用金庫の一億三千万円の資本金で出発しました。とくに自らの会社の経営責任のポストを譲って、黒壁の経営に没頭された笹原司郎さんの奮闘がありました。

使命感が黒壁を中心としたまちづくりの成功へ

社員の誰よりも早く出勤し、帰るのは全社員がみんな帰ったのを確認して深夜に帰り、常勤で、年中無休でありながら給料

は取らず、無報酬で七年間、黒壁の経営に取り組まれた笹原さんの取り組みは、まさに西田天香さんの教えを映す生き方であるといえます。

無報酬でがんばってきた館長への共感、さらには若い人材の登用、特に若い女性の管理職登用。やることすべてがマスコミの話題になりました。

一九八三年(昭和五十八年)に長浜城が完成し、長浜城歴史博物館が開館。十日間のオープニング記念イベントには五二万人という人を集め、お城ができたという喜びと誇りと、やればできるじゃないかというたしかかな手応え、喜びと誇りと自信が、その後の長浜のまちづくりの大きな力になっていきました。

自分のまちを愛し、誇り、そして何とかよくしようではないかという熱意、意欲の高まり、この三つが、どこでも元気のエキスと言えらると思えます。

それが翌年、第一回着物園遊会として大きなイベントが育つきっかけになり、一九八七年には、青空芸術市ともいえる芸術版楽市楽座、アート・イン・ナガハマ(AIN)開催への取り組みがはじまります。そして、この年に市民から市へ、黒壁銀

行の保存要望があり、一九八九年(平成元年)に黒壁博物館がオープンし、同時にふるさと情報誌、長浜『みーな』の創刊、ながはまアムニティ会議の結成、市民国際交流協会など、大きな市民グループの動きが出てきました。

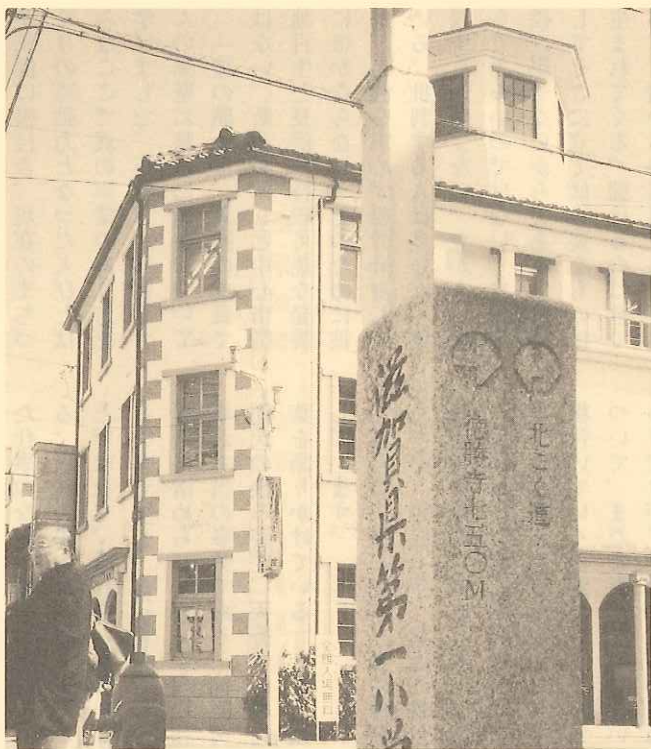
ギャラリイ楽座のオープン、一九九一年には、JR北陸本線の直流化が実現し、長浜発の快速が運行されるようになり、これがまちを変える大きな力になっていきます。

そして一九九六年(平成八年)、北近江秀吉博覧会の開催。これはNHKの大河ドラマに合わせて、市街地三カ所にパビリオンをつくっておこなった市民グループのイベントでした。八カ月間で八二万人のお客さんを呼び込み、まちのさらなる活性化の弾みになり、プラチナプラザのオープンにつながり、翌年にはまちづくり役場が開設するというかたちで、こんにちを迎えているわけです。

来年、平成十八年には、NHK大河ドラマ、山内一豊と千代さんのドラマがはじまりますので、来年を一つのまちづくりのエポックにし、さらに秋の琵琶湖環状線の実現にあわせたイベントに取り組みようとしていると

西田天香とはどんな人

西田天香さんは明治三十六年三十一歳で悟りを開かれ、明治、大正、昭和にかけて日本の思想界、教育界、宗教界に大きな影響を与え、戦後は参議院議員に当選されています。議員の間の六年間、国会議事堂の便所掃除をやりながら国政の浄化に務められたのですが、「これは、わしの力には負えん」ということで、一期だけで退いています。



復元された開智学校

長男として生まれ、小学校卒業と同時に商いの見習いに入るのですが、損得勘定と金儲けを唯一の目的とする商売人の生き方に次第に疑問を抱き、十八歳で青年会の幹事長になるときに、坂田郡の分合問題で三〇人の町民とともに県庁へ出向いて、ときの大越亨知事と大論戦を交わしたというエピソードの残る秀才だったようです。

二十歳の明治二十六年に開拓事業に乗り出すために、北海道へ渡り、長浜の商人たちとともに「必成社」という北海道開拓会社を設立し、一〇〇戸の小作農家を率いたリーダーに選ばれます。そして一〇〇戸の小作農家とともに、札幌と旭川の中間にある空知郡内の清真布で、五〇〇町歩を国から借り受けて、開墾をはじめたのですが、厳冬と極限のなかでの開拓事業は思うように進展せず、出資者からの金利の利払い、支払いの矢の催促を受けるのです。しかし、責める出資者や開拓民にもまともな配当が出せないような状況が六年続き、万策尽きて北海道を去りました。

その後、四年間の放浪生活のあと、長浜へ帰り、舎那院愛染堂で三日三晩の断食に入り、四日目の朝、赤ん坊の泣き声を聞いて、はっと大悟されたのです。火が点いたように泣く赤ん坊。ばたつと泣き声がやんだ。いまお母さんにおっぱいをもらっているんだろな。お母さんも、赤ん坊がおっぱいを飲んでくれないと、お乳が張ってしようがない。与えている喜び、与えられている喜び。その人の道。そのときそこから新しい人生が、西田天香さんの人生がはじまっていくのです。

母と乳児のあいだの喜び合いの生き方から、人間の欲望が争いの根元、無心になれば応えられる。捨ててこそ生かされる。

人間本来の生き方をそのときに悟ったのです。

西田天香さんの求道の精神は争いのない社会、慈悲の道、世の中のすべての罪は、結局私のなかにある。全体の責任を私は背負っていくことが懺悔であると唱えられ、その願いを実践する修行に「六万行願」と「路頭」という修行を見いだされます。

「六万行願」というのは、トイレの掃除です。見ず知らずのうちへ訪ねて、便所を貸してください、掃除をさせてくださいという修行はなかなかたいへんな修行でもありまして、「路頭」というのは、まさに身体一つで路頭に立つわけで、そこであるいような仕事をさせてもらいなから、食事にありつける修行といってもいいのです。

人の道と同様に、事業もまた、報恩の業を説かれてきた西田天香さんの言葉で、「事業は延ばすことよりも潰れないものをつかむことだ」という教えが述べられ、「金の力だけで仕事をしている人は、金がなくなるときに無能者になる」と、企業人には厳しい言葉をのべられています。

私が一番はつとさせられた言葉は「権力だけで仕事をしている人は、権力がなくなるときに無能者になる」という言葉で、これは鉄槌を食らったような思いをいたしました。西田天香さんの、この中身は「無の世界の追求」です。

天香さんの思想を広めた石井英夫さん

市民のあいだに西田天香さんの思想を根付かす音頭役をしてくれた人物が石井英夫さんでした。彼が中心に西田天香さんの教えを学ぶ会は昭和五十二・三年頃から始まり、この勉強会の成果が、長浜城の再興、黒壁の設立の原動力となりました。そして、石井さんを中心一九八七年（昭和六十二年）には第一回芸術版楽市楽座アートイン長浜が開催されました。

商売人に欠落しているのが芸術性だというのが、彼の口癖であり、芸術は相手に感動を与える心にほかならないと言い、民間レベルの美術館を長浜のまちにつくりたい、残したいという願いを持ち続けてきたのです。ところが残念なことに、平成五年に五十二歳で世を去りました。

彼を中心に、最初は個人の家を持ち回りでの勉強会がはじまり、二年ほどたった頃、西田天香さんから直に教えを受けた福



石井さんの活躍で成功した秀吉博

田長夫さんを中心として勉強会が長浜に根付き、現在のまちづくりの原動力となった人びととみなここで真の事業のあり方を学びました。石井さんは笹原さんの黒壁に賭けた情熱について「彼の願いは、黒壁の成長ではない。新産業興しと中心市街地再生と長浜の持続可能な発展にほかならない。そのために彼は、名利を求めず粉骨砕身している。批判する人は多いが、実践する人は少ない。金がないからできないのではない。自分を投げ出せないからである。決心してそこに立てば必要なものは生まれてくる。儲けるのは欲であり、儲かるのは真である。集めたいのは欲であり、集まらな

いのは怠りである。利益を越えた仕事のなかに本当の利益がある。事業の生命は、多くすることではなく、潰れないものを知ることである。自分も深まり、経済も清められていくような仕事事が本当の事業である。笹原司朗氏の後ろ姿が、天香さんの言葉を語りかけている」と書き残しています。

石井英夫さんを取り巻く仲間たちが、平成八年、北近江秀吉博覧会を成功させました。

黒壁とまちづくりのなかに天香さんの教えがどんなかたちで根付いていくのかということについて、まだまだ語り足りないわけですが、長浜のまちの裏側には、そんな町衆の志があります。

来年（平成十八年）は、北近江秀吉博覧会のような大イベントでまちの人たちが一つになるような取り組みをしていきたいと思っていると語ります。

しかし、黒壁と長浜の評価が一人歩きしているようなところもあるわけで、まだまだ充分ではありません。未完成でありますので、これからも行政とまちの人たちが一体となって、まちをよくしていく取り組みを続けていきたいと思っていると語ります。

講演資料より

西田天香の事業に対する言葉

すべてのものは預かりものである。

会社も家も財産も家族もという、預かるという概念。これが「燈園精神」のバックボーンになっている部分です。

●すべてのものは預かりものである。誠のある店は嫌でも人が儲けさせる。

●儲けたというものは跡形もないものです。ただ汗をかいただけが消えぬ尊い儲けである。

●商業は他の便利を図って喜ばすことを目的とすべきである。儲けはそのやむを得ない結果とするがよい。

●求めるものの儲からぬことはすでに求める心が貧乏なのである。欲で集めたものは欲で浪費される。

●行き詰まりの原因を突き詰めていくと、おおかたは己の利を先にするためである。

●策によって集まったものは、策によって散っていく。

●無理が過ぎると、きつと清算されることになる。

●儲かるようなことをしないで儲けたいというのは間違いだ。

●集めたいのは欲であるが、集まらないのは怠りである。

●儲けたいのは欲であるが、儲からないのは怠りである。

●金儲けしたくて儲かるものではなく、正直に働くので儲かるのである。

●決心してそこに立てば、必要なものが生まれてくる。

●自分を中心とした仕事は、いつかきつと行き詰まる。

●得んとするものは亡び、捧ぐる者は残る。

●本当のものは宣伝しなくても自然に拡まる。

●経済を扱うものは畏れるものを知らなければならぬ。

●正しい損は、正しからぬ益よりも尊い。

●世界の行き詰まりは、感謝を忘れたうぬぼれの累積である。

●積んだり崩したりするような仕事ではなく、生命ある仕事にかかりたい。

●深入りしてつまずくのは、こちらに欲があるからだ。

●良い商品も大切であるが、良い商人になることだ。

●損になることにも真心を尽くすこと。

●大きくすることが成功ではない。

●金を扱う者は、知らず識らず贅沢をして徳を積むことを怠る。

●誠実（まこと）がなくなると商いは干からびる。

●利益を忘れた仕事の中に本当の利益がある。信用は自分を無くした真心からしか生まれえない。

●自分も深まり、経済も清められていくような仕事は本当の事業である。

●自分の利を離れた経済生活が、あらゆる行き詰まりを解消させてくれる。

●逃げれば逃げるほど失敗は大きくなる。

●成功は無欲の中から生まれる。

●成功は量よりも質である。

●成功した時ほど反省を忘れやすいものはない。

●危ないのは責められている時ではなく、誉められている時である。

●成功が下り坂であることを気づく人はいない。

平成17年度「三方よし なるほど講座」開催のご案内

スローライフを提唱した近江商人

例年好評をいただいている三方よし理念講座は、近江商人の理念を学びながら滋賀県の伝統文化に触れることを企画しました。特に本年はスローライフという視点で、近江商人が展開した産業の現地見学を中心に計画しました。

第1回目は、暑い夏を快適に過ごすための提案を行った近江商人を取り上げ、水質保全にも貢献するヨシの講演とヨシ博物館見学です。以降、近江上布や醸造業など現地見学と学習を予定しています。多数のご参加をお待ち申し上げます。

第13回 三方よしなるほど講座

涼しい生活を提案した近江商人 - 近江の特産「ヨシ」に学ぶ

- と き 平成17年7月23日(土) 9時30分集合
- と ころ ヨシ博物館および近江八幡「酒遊館」
- 講 師 ヨシ博物館館長 西川嘉廣氏
- 参加費用 500円(現地までの交通費は各自ご負担ください)
(講演後、講師を囲む懇談会参加の場合は3,000円)

(西川嘉廣氏のプロフィール)

1934年(昭和9)滋賀県近江八幡市生まれ。生家は江戸時代から続く穀卸商。東京大学医学部卒業。東京大学化学系大学院博士課程終了。薬学博士。米国イリノイ大学、東京大学、金沢大学で、基礎医学・薬学研究・教育に従事。

2000.3 定年退職し郷里に帰り、西川嘉右衛門商店の店長。
2001.4 自宅敷地内に施設、ヨシ博物館を開設し館長。
2001.5 論文「ヨシと人の暮らしとの係わり」により、関西自然保護機構の第一回四手井賞受賞。
2002.6 ヨシに関する諸活動に対し、社会法人近江八幡観光物産協会より表彰状。
滋賀県ヨシ群落保全審議会専門委員、東近江水環境自治協議会会長。

主 催/NPO法人三方よし研究所 電話 0749 (22) 0627 FAX 0749 (23) 7720
後 援/滋賀県、みんなの滋賀新聞社、淡海文化を育てる会

予 告

とき: 10月中旬 ところ: 秦荘町金剛苑

第14回 三方よしなるほど講座 「近江上布ができるまで」

とき: 平成18年1月中旬 ところ: 県内の酒蔵(未定)

第15回 三方よしなるほど講座 「近江商人と酒づくり」

■お申込みは

電話またはfax、ホームページからも申し込みができます。
<http://www.sanpoyoshi.org/>
申込み締切 平成17年7月20日

連続参加者プレゼント

本年の三方よしなるほど講座に連続参加の場合は、最終開催日に、県内名産品などのプレゼント進呈

近江八幡 旧伴家住宅・改修工事が完了 六年がかり二億円かけて大修復

近江八幡市が平成十年度から六年がかりで進めていた同市新町の旧伴家住宅(市指定文化財)の修復改修工事が完了し、近江八幡市立資料館として公開されました。改修には、プロジェクト委員会を発足し、江戸時代の商家、明治に改修された小学校の面影を残すように腐心されました。

旧伴家住宅は、江戸時代に畳表や蚊帳などを扱う豪商・伴庄右衛門の本家で、現存の建物は文学者としても知られる高蹊(こうけい)の跡継ぎの七代目能尹(よしただ)が、母家が大地震により倒壊したことから文政二年(一八二七)から十三年の歳月をかけて建て直したと伝えられます。

江戸時代は商家、明治は尋常高等小学校・役場・高等女学校として使われ、当時の面影を今に残す重要な伝統的建造物群保存地区を代表する文化財として知られています。

昭和に入ってから、近江兄弟社図書館として使われた

あと、昭和五十八年から平成九年まで市立図書館として多くの人々が利用しました。

木造三階建て(延べ床面積六二六・八六平方メートル)の建物構造がよく見えるよう、内部には出来るだけ物を置かない展示方法を取り入れています。同保存地区の価値を広く知ってもらうために八幡商人の妻たちの衣装類や小物類、朝鮮通信使の饗応料理の模型を展示しています。開館時間は午前九時から午後五時まで。



近江商人関連資料館行事案内

7月1日～7月24日

近江商人博物館企画展「商家の家訓展」

恒例の近江商人家訓展。近江商人たちは家業の繁栄と永続を願って、自らの人生で培った経験を家訓、店則、遺言書、口伝といった形にまとめ軸や扁額、古文書などを子孫たちに伝えていきます。先人が残した知恵の結晶といえます。人生の珠玉のメッセージの数々を紹介しています。

入館料 大人二〇〇円、月曜日・祝日の翌日は休館

午前九時三十分～午後五時まで

●問い合わせ先 近江商人博物館

電話 〇七四八―四八―七二四七

日野町「旧正野薬店」が改修され

日野町観光協会事務所が移転

万病感心丸で知られる正野玄三宅がこのたび改修され、日野町観光協会の事務所が移転してきました。館内には正野家に伝わる薬関係の資料展示コーナーや喫茶コーナーがあり、落ち着いた日野のまちなみ散策の休憩所に最適です。近江日野商人館にも近く是非一度お立ち寄りください。

●場所

蒲生郡日野町村井二二八四番地

電話 〇七四八―五二―六五七七

休館日 毎週月曜日、祝日の場合は翌日

および年末年始

開館時間 午前九時～午後五時

(喫茶コーナーは午後四時まで)



栈敷窓アート展でにざわう(旧)正野薬店の店頭(2002年)

三方よし研究所の新刊のぐい案内

「近江旅の本」シリーズ第一弾

近江の商人屋敷と旧街道

NPO法人三方よし研究所編

発売中

近江八幡、五個荘、高島、日野、豊郷…。旧街道沿いなどに残る商人屋敷を訪ね、そこから果立った代表的な近江商人の業績とあわせて案内する。旅情を誘うカラー写真を多数掲載し、観光ガイドを充実させた決定版。

※「近江商人のふるさとを歩く」を改稿・加筆・改題



A5判128頁 定価1890円(本体1800円)

末永國紀 著

『近江商人学入門-CSRの源流「三方よし」-』

B6判212頁 定価1260円(本体1200円)

発行所 サンライズ出版 TEL0749-22-0627
オンラインショップ <http://www.biwacity.com>

全国の書店にて発売中

近江商人が到達した経営理念「三方よし」は日本生え抜きのCSRであり、良き企業市民を目指す現代企業にとって示唆するところが大きであると説かれています。

てんびん棒

昨年度の三方よし理念講座の内容のご紹介が本号でようやく完成。時期はずれの報告で誠に申し訳なく思っています。本年は三方よし経営理念講座をグッとわかりやすいテーマと内容に変更しました。題して「三方よし なるほど講座」です。とくに本年は、近江商人が庶民のライフスタイルを牽引してきた事実をもっとご紹介しようという趣旨です。四〇〇年余の歴史を持つ西川家は、江戸市中に売り声を高らかに蚊帳を売り歩き、湿度の高い日本の夏を涼しく暮らせるライフスタイルを提唱したと伝わります。見た目にも涼しげなヨシの製品も同様です。素足でひんやり感じるヨシの敷物は噴出しそうな汗がたちまちにひいてしまうような感覚があります。第一回はヨシ博士の講座です。どうぞお楽しみください。

★本紙は滋賀県よりの補助金を受けて発行しています。

●定期購読ご希望のみなさまへ

情報紙「三方よし」は本年より年3回の発行を予定しています。次回は3月末の発行です。定期購読をご希望の方は、送料など手数料相当分800円分の切手を添えてお申し込みください。なお三方よし研究所会員および賛助会員のみなさまには無償で送付いたします。

●NPO法人三方よし研究所

近江商人の経営理念である「三方よし」が現代社会の中での生活規範となるよう様々な活動を行っています。詳細は下記事務局までお問い合わせ、またはホームページをご覧ください。情報紙「三方よし」の無償配布および各種講座への割引特典があります。

問い合わせ先 ☎0749-22-0627